

中学生と地域 が心ひとつに 運動会



生徒数の減少、地域への貢献などを考え、板取中学校の体育祭と板取地域のふれあい運動会が合同で開催されました。中学生と地域住民がひとつにまとまって運動会をするのは、市内では初めてのこと

で、中学生が企画運営しました。中学生とお年寄りがペアとなって、おたまにのせたピンポン玉を落とさないように運ぶ競技や丸太の速切り競争など、多様な催しでふれあいの時間を楽しみました。

あんな事、こんな事

関市イメージキャラクター
「関*はもみん」



調査で水の大切さを理解

地元を流れる肥田瀬用水の水質を調べて、自然環境について学ぶ教室が富岡小学校であり、4年生児童が「パックテスト」を使って調査しました。水のCOD（化学的酸素要求量）測定をし、テストの結果は薄い色に反応。肥田瀬用水はきれいな水であることが判明しました。日ごろの生活での水が、魚や水辺の生物にとってどのような影響が出るのか学習しました。

へちまでぜんそく封じ

ぜんそく治癒のご利益で知られる伝統の祈祷「へちま加持」が9月25日、関善光寺で営われました。中秋の名月の前後に毎年ある恒例行事で、県内外から多くの参拝者が訪れました。住職が読経した後、一人ずつ加持祈祷したへちまとお守りが渡されました。お加持を済ませた参拝者には、へちま入りの味噌汁が振る舞われ、病氣平癒と健康を祈っていました。





すり鉢かぶり頭痛封じ

頭痛や悩みなど、頭の病を封じる祈祷行事「すり鉢灸(やいと)」が武芸川町八幡の福寿寺でありました。川中島の戦いで、頭痛に悩まされていた武田軍兵士のかぶると、もぐさを載せて呪文を唱えたところ、痛みが治まったことに由来。毎年、春と秋の彼岸の中日に行われています。参拝者は、火のついたもぐさが載っているすり鉢を頭にかぶり、住職から呪文が唱えられると、神秘的な面持ちで手を合わせていました。

炎に無病息災を願う

行者の仏閣として平安時代に建立された迫間不動尊で、参詣者の願いが書かれた護摩木を火にくべる秋の大祭「採灯大護摩」がありました。山伏姿の修験者が読経し、弓矢を放って境内を清めた後、約1.5メートルの高さに積まれた檜の葉に点火。白い煙と大きな炎をあげる火中に無病息災などの願いを込めた護摩木が投げ入れられ、周りを囲んだ参詣者は燃える炎を見守り、手を合わせて祈願していました。



おいしさの秘密を探りました

富野小学校で、食品会社職員による「味覚教室」が開かれ、5年生児童がおいしさや味のしくみについて楽しく学習しました。講義で、甘味・酸味・塩味・苦味・うま味の5つの基本味のうち「うま味」は、日本人が昆布のだしの研究から発見したことなどを知りました。また、児童らは「みそ湯」にだしを加えて試飲したり、かつお節削りなどの体験を通して、和食の「だし文化」に触れていました。

自転車で華麗な妙技

障害物や傾斜地などが設けられたコースを、自転車で足をつかずに走破する「板取カップバイクトライアルかぶどん大会」がすぎの子キャンプ場で開かれ、県内外から多くの参加者が集まりました。元世界チャンピオンの選手を講師に招き、自転車の操り方、障害物の越え方などを学んだほか、難易度別に分かれた競技では、体全体でバランスを保ちながら岩を飛び越えるなど、テクニックを競い合いました。



こぼれ話



総務省が毎月発行する広報紙の巻末4ページに、全国の地方自治体を紹介する「地方のかがやき」というコーナーがあり、10月号でわが岐阜県関市の「災害に備えた安全・安心なまちづくり」が取り上げられました。今回の取材は、自分たちのまちは自分で守る「自助共助」を基本にした防災のまちづくりを進める関市の先進的な取り組みが、とてもタイムリーで参考になり、東日本大震災に伴い防災対策に力を注いでいる全国の市町村に紹介したいというものでした。

これまでの取り組み内容として、全国に先駆けて導入した防災バス「あんしん号」、市民の防災意識を高める防災パレード、市民に防災の大切さを伝える夜間防災訓練や市民防災講演会、行政が率先して防災に取り組む防災危機管理研修や消防団市役所隊、災害時食料確保を啓蒙する防災農園などが掲載され、全国に向けてアピールすることができました。

いずれにしても、市民の真の安全・安心な生活の確保は、市の最重要課題のひとつですので、今後も皆さんと一緒に「しあわせなまち」の実現を目指して頑張ります。